

【中国からの日本ウォッチング—人民日報の日本関連記事から】

2006年5月2日の人民日報に「『実用主義』の訪問」と題する記事が掲載されました。内容は小泉首相のエチオピア・ガーナなどのアフリカ訪問に関するもので、今回の訪問を日本の『実用主義』外交だと捉えています。「日本は世界のエネルギー消費大国であり、一方、アフリカは世界8大石油産出地域の一つである」「日本は世界の希少金属消費の20%を占めており、アフリカは品質の優れた希少金属を産出する」ことがその背景にあるというわけです。

確かに、自動車・家電・電子関係など希少金属を必要とする産業は多く、日本がそのほとんどを輸入に頼っているのも事実で、中国からも相当量を調達していますが、中国国内での需要が増大するにつれ、その確保が徐々に困難になっていくことが予想されます。記事では自分の利益だけを考える「日本の『実用主義』がアフリカの人々の心を傷つけている事を反省すべきだ」と結論付けています。

その分析が正しいかはさておいて、一方で中国のアフリカに対する資源外交にはすさまじいものがあります。3月6日の読売新聞に「中国の石油戦略」（郭四志氏）と題する一文が掲載されましたが、その中で郭氏は「石油需要が急増し始めた1990年代以降、中国政府の首脳・要人は、石油確保のため40回以上も中東やアフリカ・南米・中央アジアなどの産油国を訪問した。その一方で、産油国首脳の中国への招待も、40回近く実現させ、活発な資源外交を展開した」と指摘しています。資源のためなら国際社会の非難を浴びている一部の独裁国家とでも手を結ぶ、といったなりふり構わぬ中国の資源外交を非難する向きも有ります。

公平な立場から見ると、どちらにとってもアフリカの資源は魅力的であり、また、日本の国連安保理常任理事国入り問題に絡んで、アフリカの票を巡る争いも絡んでいます。国益を考えた互いの丁々発止のやり取りが続きます。